

# 特別講演



# 21世紀における戦争

トーマス・マンケン

## 序論

本稿では、相互に関連する3つの幅広いテーマを取り扱う。まず、理論と歴史の関係を取り扱い、この関係が軍人全般および将来の戦争を予想する取り組みに及ぼす影響について考察する。次に、戦争の特徴と遂行における、継続性と変化の諸要因を概観する。最後に、国際的な安全保障環境の大きな特徴としての大国間競争の再興が呈する、特有の課題について論じる。

## 理論、歴史と軍人

まずは最も幅広いレベルから始めて、理論と歴史の関係と、それが軍事史研究を含めた軍人に及ぼす影響について検証したい。

軍人とは、高度に理論的な職業である。実際のところ、そうでなければならない。戦争は時々しか起こらず、それは一度限りである。結果として、軍人の知識は実戦的なものよりも理論的なものにならざるを得ない。

この意味で、軍人は特殊な職業である。例えば、ある外科医が、最新の医学雑誌の大半を読み、手術室で他の医師の様子を観察し、訓練用の医療器具を使って練習することで仕事に必要な技能を熱心に学んではいるものの、実際の外科手術はキャリア全体を通じてせいぜい数回しか行わないとする。また、その外科医が師事した教授らや研修で指導を受けた外科医らも、ほんの数回しか手術をしたことがないとする。さらに、それぞれが異なる外科手術を異なる患者に対し、一度限りの状況で行うと想像してみしてほしい。比喩的に言えば、軍人とはそういうものなのである。

将来の戦争の特徴について、平時の観点から予想することが難しい理由は4つ存在する。そのうち2つは戦間期の特徴に関連し、残りの2つは戦争の本質自体に関連する。

第一に、戦間期には諸国家の勢力や能力が興亡することにより、地政学的変化がもたらされる。第二に、戦間期には従来の解決方法が通用しない既存または将来予想されうる戦略上・作戦上の課題に対応するため、諸国家が新たな戦争の方法を展開させて軍事技術の変化が頻繁に起こる。戦争以外の文脈で、このような変化が将来の戦争に及ぼす影響を正確に予想するのは極めて困難である。

同様に、戦争の本質自体によっても、将来の紛争の形を予測することは困難である。第一に、戦争が政治の暴力的延長であるという事実こそが、戦争の予想を困難にしている。各主体（アクター）がなぜ戦争に訴えるのか、戦争によって何を達成したいと望んでいるかを理解しなければ、将来の紛争の特徴を把握するのは困難である。第二に、戦争は双方向的なものであるため、その経過を予想するのは難しく、まして戦争自体を予測するのはさらに困難である。

軍人や研究者の間では、戦場を取り巻く不確実性を指して「戦争の霧」という言葉がよく使われる。しかしながら、英国の歴史学者マイケル・ハワードが40年前に指摘したように、将来の戦争の特徴を不鮮明にする「平和の霧」も存在する。ハワードは、次のように書いている。

平時における……軍人は、推測航法によって航行する船員のようなものである。前回の戦争という陸地を離れ、その戦争の経験をもとに推測しながら進む。前回の戦争からの距離が離れているほど、推測を誤る可能性が大きくなる。時折、雲の切れ間が生じて、小規模な紛争がどこかで起き、特定の兵器や技術の効果が明らかになることで「解決策」が示されるが、その解決策は疑わしい……多くの場合、最後の瞬間まで平和の霧の中で航行を続けることになる。やがて遅れて雲が晴れる頃には、眼前に陸地が迫って来るものの、それは恐らくは砕け散る波と岩壁である。測量が正しかったかどうかを判明するときには、時すでに遅しなのである<sup>1</sup>。

ハワードは、熟考する時間は十分にあるが大きな不確実性を伴う平和と、確実性はあるが適応するための時間がほとんどない戦争とを見事に対比している。

実際のところ、平時の軍隊が回答しなければならない基本的な問いは「新しい戦争の特徴とは何か」である。この全体的な問いの中には、次の5つの付随的な問いが含まれる。

- 敵は誰なのか？
- どこで起きるのか？
- いつ起きるのか？
- なぜ起きるのか？
- どのように展開するのか？

最後の2つの問いは、個々の紛争の文脈でしか理解することができないため、回答が最も困難である。

<sup>1</sup> Michael Howard, "Military Science in an Age of Peace," *Journal of the Royal United Services Institute for Defence Studies*, 119, no. 1 (March 1974), p. 4.

## 継続性と変化

それでは、21世紀の戦争の形について、歴史研究が教えてくれることは何であろうか。過去は私たちの前方の陸地を、不完全な形であれ、照らし出すことができるのだろうか。

まずは、戦争史を通じて変化せず、将来も変化しないであろう継続性について考えることから始めてみたい。

継続性の第一の要因は、戦争の本質である。戦争は常に「相手にわが意志を強要するために行う力の行使」であり、相手もこちらに対して同じことをしようとする<sup>2</sup>。私たちは「非正規戦争」や「ハイブリッド戦争」などのように、戦争に形容詞をつけたがる。しかしながら、根本的な次元で、戦争は戦争なのである。戦争の様々な形態は、戦争を犯罪行為や海賊行為などの他の暴力行為と比べたときよりも、互いに多くの共通点を有する。

継続性の第二の要因は、戦争につながる動機である。古代ギリシャの歴史家トゥキディデスが2,000年以上も前に言及したように、戦争は「恐怖、名誉、利益」によってもたらされる。戦争が明確に人間の営みであり、人間の本質が過去数千年にわたって変化していないことに鑑みれば、これは驚くことではない。現代の識者の大半は、諸国家が自らの利益を求めて戦争を始めるという考え方に異論がないであろう。また、新興の対抗勢力が支配的勢力に対して感じる恐怖が戦争につながるという考え方にも同様であろう。これに対し、名誉のための戦争という考え方は、時代遅れに見えるであろう。しかしながら、動機としての名誉の力を過小評価すれば、我々は自らを危険に晒すことになる。

戦争の継続性に諸要因があるように、変化の諸要因も当然に存在する。戦争の本質が変化していない一方、戦争の特徴はいくつかの点で大きく変化している。例えば、航空戦はここ数十年間で変容を遂げた。ベトナム戦争の頃までは、航空戦は非常に血なまぐさいものであった。これに対し、近年の紛争では、航空戦における地上の人々への空爆の殺傷能力がますます高まっているにもかかわらず、少なくとも大気中の人々にとっては、リスクがほとんど存在しない。情報革命によりあらゆるものが精密化され、戦争の特徴が変化しつつある。加えて、戦争は宇宙やサイバー空間にも広がりつつある。

## 大国間競争の再興

歴史と理論は、安全保障環境における最も重要な展開に光を当てることができる。それは大国間競争の再興である。

<sup>2</sup> Carl von Clausewitz, *On War*, edited and translated by Michael Howard and Peter Paret (Princeton, NJ: Princeton University Press, 1989), p. 75.

ここ数年、世界は米国、中国、ロシアによる、平時における競争の時代であることが明らかになってきている。誤解のないように言えば、競争は紛争と同じではない。また、競争が必ずしも紛争につながるわけでもない。しかしながら、私たちは大国間競争という現実に加えて、大国間戦争の可能性の増大にも直面していると認めざるを得ない。この可能性はわずかではあるが、あり得ないことではなく、そのような紛争の可能性は高まりつつある。

このことが重要な理由は、3つ存在する。第一に、最も明らかなのは、大国間戦争がもたらす結果が桁外れに大きくなりうるからである。これは世界秩序に影響を及ぼす、21世紀最大の出来事の1つになりかねない。第二に、現代の文民政治家や軍指導者の大半が、大国間の競争および紛争に関する職業的経験を有していないからである。歴史学者が数十年ないし数百年という単位で物事を考えることに何の苦もない一方、軍人にとっては、冷戦終結後から現在までの四半世紀以上という期間は、自らの軍歴と重なる。第三に、米国とその同盟国の軍隊が対処を想定してきた状況は、私たちが今日直面している状況や今後直面すると考えられる状況とは、大きく異なっているからである。

## 現状に至った経緯

現在の状況の目新しさを十分に理解するためには、これまでの四半世紀を振り返ることが不可欠である。米国は冷戦終結後、世界史上でもまれな地政学的支配の時代を経験した。この支配は、米国が特に精密攻撃能力と情報能力の面で単独での軍事的優位を獲得していたことによってさらに強化された。

この支配は、1991年の湾岸戦争の際に表面化した。このとき米国は、大規模で有能な多国間同盟を形成し、その軍事的優位を最大限に利用してイラク軍をクウェートから放逐するのに大きな効果をもたらした。

湾岸戦争後の四半世紀は、2つの時期に分けることができる。前半は米国の「超大国」に彩られた1990年代の10年間であり、後半は2001年9月11日の米国同時多発テロ事件以降に、米国がイラクやアフガニスタンなどで非正規戦争に断続的に関与した約15年間である。

米国の経済力と軍事力が拡散していくにつれて、米国の戦略・作戦・戦術レベルでの優位性は損なわれていった。その結果として、現在のような戦略・作戦・戦術レベルでの均等な状況が生まれたのである。

## 今後どこへ向かうのか

私たちは今日、過去数十年間で初めて、大国間戦争について真剣に考える必要性に直面している。そして実際には、大国間戦争に適応できる戦力構成や戦力態勢かどうかを自軍の最も重要な評価基準にすべきであると強く主張したい。

将来の大国間戦争は、文字通りに前例のないものとなるであろう。敵対勢力は恐らく、核兵器、精密攻撃システム、サイバー・宇宙空間での能力を保持しているであろう。このような戦争は、近年の戦争とは大きく異なる様相を見せるはずである。例えば、次のような特徴が考えられる。

- 高い消耗度と、それに伴う戦争支援のための社会的・産業的動員の必要性
- 国土への非動的攻撃と潜在的な動的攻撃
- グローバル経済システムの崩壊

もっとも、大国間戦争は以前より可能性がわずかに高まっているとはいえ、あくまで可能性に過ぎない。今日の私たちが直面している現実、持続する大国間競争である。自分たちが置かれている現状に対し、私たちは十分な備えができていないのではないか。

このため、第一に抑止力、リスク、政略戦といった古い概念を改めて深く理解する必要がある。第二に、相互依存、グローバリゼーション、ソーシャル・メディア、無人・自律型システムや人工知能といった新技術の出現を特徴とする21世紀の状況に、従来の伝統的概念を適応させる必要がある。

## 結論

結論として、私たちは大国間の競争および紛争の歴史を学ぶ必要がある。そして、過去の類似点と相違点を慎重に判断する必要がある。最後に、特に重要な点として、私たちは知的資本と知的能力を再構築（場合によっては構築）して、自分たちが生きる時代、そして近い将来の来るべき時代に対処することが求められる。

